

# 難波西鶴と海之道

【24】

森田 雅也

難波の西鶴『日本永代蔵』(元禄元(1688)年刊)巻二の五「舟人馬かた鏡屋の庭」は遠く海を隔てた酒田の豪商「鏡屋」の様子を描写しますが、商人魂にも及ぶ教訓も教えてくれます。

前回の本文に引き続き、「この問屋に数年あまた商人形気を見及びけるに、はじめての馬おりより、萬籠をあけて、都染めの定紋

付に道中着物を脱ぎかへ、鞆皮取りすて、新しき足袋・草履、鬘撫でつけて咬楊枝、誰にか見すべき采舂をつくらひ、「このあたり

の名所、見に行く」とて、用を勤めし手代を案内につれける人、今まで幾人か、して出られしためしなし」という記述があります。

冒頭の「商人形気」を「数年」「あまた」見つけてきたのは、誰かと言うと、この場合は西鶴だといふことに

## 鏡屋記述から分かる将来性

なるでしょう。この部分をもってしても、西鶴は酒田まで頻繁に通っていたということになるのですが、そのせさんざんはさておきま

この酒田の鏡屋で見ていると、鏡屋に到着するや、遊び着の紋付きに替替え、ヒキガエルの背中の鞆のような革で作った、道中用の刀の鞘袋(鞆皮)を取草履に履き替えて、鬘の毛を油でなでつけ

それに比べて、続いて「親かたがかりの、程なく親かたになる人は、気の付け所各別なり。ここに替替とい

かはりたる事はないか」「所々で気色はかはる物にて、日和見さだめがたく、あの山の雲だちは、二百目をま

なる商人は、気のつけどころが違ふのです。鏡屋に到着するや、若い手代に近づき、「先月中頃の書状の通り、相場は崩れていないか」「想定外の台風は

は何時」と、入る事はかりを尋ね、干鯉のぬけ目のない男、間なく、上がったの旦那殿より身代よしとなられける」と記します。

こういふ面に気配りができた商人は、大概成功します。干鯉に持ち手を作るために目を抜くように、抜け目ない商人なのです。

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

# 抜け目ない商人はだれ?